

歴史散歩と逸話(二)

— 旅日記編 —

歴史散歩と逸話（二）——旅日記編——

はじめに

昨年出版致しました、拙作「歴史散歩と逸話」は、お蔭様で皆様からご好評を戴き、筆者としては、この上ない喜びであり、感謝しているところであります。その後も歴史散歩は続けておりますが、前作以降の散歩についても、その都度、旅日記を認めておりますので、それら日記を多少補正して、第二編を発行することになりました。

前作は、「逸話や説話」を出来るだけ多く記すことに重点を置いて作成しましたので、各々の旅での訪問先を限定して、各「話」の表題とし、逸話や説話を記して、出来るだけ簡潔に概要を記述することに心掛けました。実際は、各旅では、一五kmほどの距離を数ヶ所巡っておりますので、今回の第二編は、旅毎での訪問先を全て記し、概要を説明しながら、史実や伝承また逸話などを交えることに致しました。従いまして、各「話」は、その日の様子や訪問先についての状況も出来るだけ詳細且簡潔に記し、訪問時の季節や天候を寸描しながら、訪問先へのアクセスも記した紀行文でもあります。

尚、第二編は、主として前作以降の新しい訪問先についての記述ではありませんが、史実や伝承の関連から、前作に記した内容と重複する箇所がありますが、中味がより濃いものになるといふ観点から、敢えて重複を避けることは控えた次第です。また、史実や伝承、逸話等については、古典や歴史書、古今の考古・歴史学者や作家の著作に加え、歴史セミナーや講演、寺社の縁起や地元の人達の話などから、ご教示戴いたことが基になっておることは、前作同様であり、主たる参考・引用文献は前作末尾に記載通りであります。

今回も、「大和」、「近江」、「山城」、「河内・摂津」の主な畿内の四地域の旅日記であります。余暇の慰みとして、ご一読戴ければ、大変幸甚であります。

平成二十年十二月二十六日

小 仲 孝 義

目次

◆大和散歩

第一話	額田王と鏡王女(一)	1
第二話	額田王と鏡王女(二)	7
第三話	紀路を歩く	13
第四話	お水取りの話	17
第五話	三輪山登拝記	24
第六話	葛城の道(一)	29
第七話	葛城の道(二)	35
第八話	橿原散歩	41
第九話	奈良町界限(一)	48
第十話	奈良町界限(二)	55
第十一話	生駒の歴史(一)	60

第十二話	生駒の歴史(一)	64
第十三話	生駒の歴史(三)	68
第十四話	大来皇女を偲ぶ道	71
第十五話	柳生街道をゆく(一)	77
第十六話	柳生街道をゆく(二)	85
第十七話	外京の大寺	91
第十八話	竜田道散歩	100
第十九話	名勝・大和三山	107
第二十話	磐余から纏向へ	116
第二十一話	北・山の辺の道	123
第二十二話	笹酒祭り	129
第二十三話	田原本町界隈	132
第二十四話	壺阪の道	136

◆近江散歩

第二十五話	鯖街道をゆく	143
第二十六話	大津散歩	148
第二十七話	逢坂の関	156
第二十八話	中山道をゆく	164
第二十九話	比叡山登拝記	169
第三十話	北大津・小野から和邇へ	179
第三十一話	瀬田唐橋界限	187
第三十二話	堅田落雁	195

◆山城散歩

第三十三話	木津散歩	201
第三十四話	藤原道長展	206
第三十五話	京都・上京界限	213

第三十六話 伏見散歩……………223

第三十七話 東山・山科探訪……………230

第三十八話 醍醐・白野散歩……………235

第三十九話 八幡さん……………243

第四十話 南山城散歩……………250

◆河内・摂津散歩

第四十一話 北河内散歩……………258

第四十二話 中河内散歩……………263

第四十三話 松原・柏原散歩……………268

第四十四話 二上山麓・河内の古墳群……………274

第四十五話 難波から大和への道……………281

大和散歩

第一話 額田王と鏡王女（一）

万葉の女流歌人「額田王」に縁が深いと謂われる大和郡山市の「額田部」ぬかたべの地は、近鉄橿原線の「平端駅」ひらはたから近い。

「あまりにも有名な額田王の歌」

あかねさす 紫野行き標野行き 野守は見ずや君が袖振る

卷一―二〇

（人は見ているではありませんか、あなたが袖をお振りになるのを）

「この歌に対する大海人皇子の返歌」

むらさきの にはへる妹を憎くあらば 人妻ゆえにわれ恋ひめやも 卷一―二二

（紫の色のようにつややかに美しいあなたを、憎く思うならば、何で人妻であるのにこの私が恋焦がれようか）

*日本書紀・天武二年にあるように、額田王ぬかたのおおきみは大海人皇子妃として「十市皇女」とゐろひめみを生んだ。彼女は、後に天智天皇妃となり、娘の十市皇女は、天智の大友皇子の妃となり、大津宮に住んだ。六七二年の「壬申の乱」で、大海人皇子が、大友皇子の近江軍に勝利し、天武天皇として即位することになるが、十市皇女は、大海人皇子側へ近江の動向をこっそり伝えたといわれる。

額田王、鏡王女、天智天皇、藤原鎌足の歌数首

一、「額田王が、天智天皇に伴って遷都した「大津宮」に向う時、奈良山で歌ったとされる歌」

三輪山を　しかも隠すか雲だにも

　　こころあらかなも隠さふべしや　卷一―十八

(三輪山をそのように隠すのか。せめて雲だけでも思いやりがあつてほしい。三輪山をそのように隠してよいものだろうか)

二、「天智天皇が鏡王女に贈った歌」

妹が家も　継ぎて見ましを大和なる

　　大島の嶺に家もあらましを　卷二―九一

(大和の大島の嶺に貴女の家があったら、いつも見ることができるとのこと)



三輪山

「鏡王女が唱和した歌」

秋山の木の下隠り行く水の われこそ益め思ほすよりは

卷二―九二

(秋の山の木の下を流れゆく水の流れが、だんだん大きくなるように、私の思いは貴方の思いよりは、まさっているのですよ。)

三、「鎌足が鏡王女に求婚した時、鏡王女から鎌足への歌」

玉くしげ 覆ふを易みあけて行かば 君が名はあれどわが名惜しも

卷二―九三

(覆い隠すのがたやすいことと言って、夜が明けてから帰ったなら、貴方の浮名は立つのはともかく、私のほうは困ります)

「鎌足から鏡王女への返歌」

玉くしげ みむろの山のさねかづら さ寝ずはつひにありかつましじ

卷二―九四

(三輪山のさねかづらではないが、共寝をせずにはとても耐えていられないでしょう)

四、「額田王が天智天皇を恋しく思つて歌つた歌」

君待つと わが恋ひをればわが宿の すだれうごかし秋の風吹く

卷四―四九一

(貴方のおいでを待つて恋焦がれていると、わが家のすだれを動かして秋の風が吹いてくることだ)

「鏡王女が作った歌」

風をだに 恋ふるは羨し風をだに 来むとし待たば何か嘆かむ

卷四―四九二

(風だけでも待ち焦がれていられるのは羨ましい。せめて風だけでも来るだろうと待っていていられるなら、何を嘆くことがありません)

額田王と鏡王女は額田部で誕生

さて、額田部の地は、佐保川、富雄川、初瀬川が大和川に合流する一帯であるが、高名な歴史学者の「岸俊男先生」の著述によると、額田王は、恐らくこの地で生まれたであろうとされる。天智天皇妃を譲り受け藤原鎌足の正妻になった「鏡王女」は姉であるので、同じくこの地で誕生したと思われる。また、神戸女子大学の鈴鹿教授によると、「薬師寺縁起」に「采女・鏡王額田部姫王、生一女・十市女」とあり、これは、大海人皇子の妃であった「額田王」を指している。額田王と鏡王女の父親は「鏡王」であるが、出身ははっきりしないが、恐らくこの地に居たであろうといわれる。然し、近江の鏡神社や鏡山のあつる「鏡の里」、つまり、今の「野洲」であつ



額田王歌碑 (山の辺の道)



鏡王女歌碑 (忍坂道)

た可能性も言われる。同地を訪問した時、土地の古老にこの里の名称の謂れを尋ねたが、鏡が発掘されたからでしょうとの他愛無い返事であった。

当時、天皇の妃は、「皇后」一人、「妃」^ひが内親王二人、「夫人」^{ぶじん}が中央豪族の娘三人、「嬪」^{ひん}つまり采女は、地方豪族の娘四人と定められていた。額田王は采女であったので、地方豪族の娘ということになるが、額田部は、中央の飛鳥に近いが地方に入るのかどうか、また大伴氏や蘇我氏のような大豪族でもなかった。また「鏡王」は近江の豪族であった可能性も残る。尚、推古天皇の名前は「額田部皇女」であるので、この地と何らかの関係があったものと考えられる。

額田部は当時の高級住宅地

岸先生のお弟子で国立奈良文化財研究所の当時の狩野調査部長によると、「額田部」や「飽波」の地は、「斑鳩」にも近く川に挟まれた肥沃な農耕地が周囲にあり、複数の豪族が居住していた。元は、出雲出身の豪族であった「額田部連」も然り。また王の宮もあった由で、聖徳太子もこの地の宮に居住した形跡もある由。つまり、この地は、当時の高級住宅地であったという。現在の風景をみると、田圃の中に民家が混在しており、民家も、よく田舎で見られる極く庶民的な家屋が集まっており、軒と軒との間道も狭い。千四百年後の姿である。

額安寺

当地に「額安寺」という古寺がある。元は、聖徳太子が、学問道場「熊凝精舎」^{くまねいしょうじや}を置いた旧地で、額安寺は推

古天皇の命名であるとされる。当寺は後の「大安寺」の前身であると言われている。尚、当寺の脇には、「推古神社」が鎮座しており、境内はきれいに清掃が行き届いている。額安寺は、七堂伽藍の大寺であったが、衰退し、鎌倉期には、高僧の「興正」や「忍性」によって復興されたが、以後戦火に遭い本堂を残すのみで衰退した由。数日前の新聞報道では、近年の三代にわたる住職の尽力で、本堂の改築、菩薩堂の建設や境内も一新して美しく蘇っている。無論、現在の境内は小規模である。

受付に伺うと、お堂内部を拝観されますかというので、拝観料四百円を払うと、本堂と菩薩堂を開扉してくれた。一月末の寒空の中、こんな処まで参観に来る酔狂な人は少ないと見えて、参観者は小生一人である。ゆつくり拝観下さいといって、受付嬢は下がった。本堂の本尊は、彩色が濃厚に残る「十一面観音立像」が大きな厨子に安置されており、両側に脇菩薩立像が配置されている。奥には、聖徳太子の青年像の掛け軸や不動明王が配備されている。

「菩薩堂」は、境内の山門の正面にあり、中には、来迎印の「虚空蔵菩薩」と獅子に跨った「文殊菩薩」がガラスの中に安置されている。何れも重要文化財である。虚空蔵菩薩は、本邦最古とされ、文殊菩薩も平安期十一世紀造立とされている。両堂ともに、ゆつくりと拝観させて貰い、拝観料には充分以上に見合うものであった。再建なったばかりの堂は眩い限りだが、後世参観に来る人達は、きっと古い建物として拝観されることであらう。



額安寺

う。

当寺から脇道を北側に登ると、「鎌倉墓」と称する、額安寺の墓地があり、観音様の石造立像があり、前面には、かなりの数の古い五輪塔がある。僧「忍性」の大きな五輪塔もある。八基が重要文化財という。細い路地を進むと、「史跡額田部窯跡」との石碑が立っており、小屋がある。扉は自由に開けられるようになっており、開けると、中に、窯跡が保存されている。昭和三年に三基発見された内の一基が保存されている由で、鎌倉期に額安寺の瓦を焼いた遺構とされ、重要文化財になっている。

第二話 額田王と鏡王女 (1)

額田王と鏡王女は同一人物なのか

「明日香風」一〇〇号記念号（平成十八年十月一日発行）に高名な歴史学の大家「直木孝次郎先生」の爆弾的論文が、「万葉歌人、鏡王女、の実名を探る」とのタイトルで発表された。先生の結論は、「額田王」は「鏡王女」であるといわれる。従来の通説では、鏡女王と額田王は、鏡王の娘で姉妹であると了解されている。歴史学の權威の直木先生の説に従えば、諸々支障が生じて、浅薄な小生の頭は混乱するので、整理してみたい。



鏡王女墓

通説とその根拠

鏡王女と額田王は姉妹である。そして、鏡王女は鏡女王と同じであり、鏡姫王とも呼ばれた。

一、興福寺縁起

九世紀期末、成立した興福寺縁起には、「天智天皇二年、内大臣（鎌足）の嫡室・鏡女王が…尊像を安置せんと…山階に宝殿を構ず…」の記述がある。これによれば、鏡女王は、鎌足の嫡室に迎えられており、山階寺やましなでらを造ったことになっている。

二、万葉集

第一話（三）の万葉歌・卷二一九三の題詞には、「内大臣藤原卿、鏡王女を娉よほふ時、鏡王女、内大臣に贈る歌一首」とある。

三、日本書紀

天武紀二年に「鏡王女額田姫王」の記述あり。鏡王の娘・額田部姫王の意。天武十二年に「天武天皇が鏡姫王の宅へ見舞いに訪れ、翌五日、鏡姫王が薨じた」とあり、天皇が見舞いに訪れるほど丁重に扱われる高貴な女性であることが分かる。

天武紀五年には、親王、皇女、姫王、内命婦の記述があり、持統紀五年には、親王、内親王、女王、内命婦の記述があり、姫王に対応する称号は、女王であることは明らかである。また、万葉学者の間では、姫王とい

う称号は、女王と同じ意味であることが常識になっている。

四、記紀・続日本紀

实例から、大宝律令以前には、天皇から生まれた一世は、「皇子」、「皇女」と呼ばれ、二世王（皇子・皇女の子供）以下は、王、女王（または姫王）と呼んでいた。また「女王」を略して「王」という例も多い。

五、葉師寺縁起

「采女・鏡王額田部姫王、生一女、十市女」とある。つまり、鏡王の娘・額田部姫王（女王）とされ、十市という女子を産んだ。尚、十市皇女は「額田王」の娘であることは、はっきりしている。

六、鏡女王は実在した。

「延喜式」の舒明天皇を祀る、押坂内陵の項に「押坂墓、鏡女王、押坂陵域内、東南にあり、墓守なし」の記載があり、実在したことが知られる。現に、忍坂（押坂）街道の山手、外鎌山麓にある、舒明天皇陵の上手の田圃道を上ると、鏡女王墓所が存在しており、田圃道脇の細流に、卷二一九二の彼女の万葉歌碑が置かれている。（更に上手には、欽明天皇の皇女とされる大伴皇女の墓所もある）

七、額田王と鏡女王の万葉歌

第一話（四）の万葉歌・卷四―四九一・四九二は額田王と鏡女王が、それぞれ天智天皇を恋しく思つて歌つ

た歌である。

直木説の結論と根拠

額田王は、鏡王女と同一の女性である。鏡王女の名を鏡女王とする説は、成り立たず、九世紀末成立した「興福寺縁起」は、孤立した伝えであり、フィクションである。鏡王女の名で伝わる、あの巧みな歌の作り手は、額田王以外に考えられない。

一・女王は略して王という場合はあるが、女王をひっくりかえして、王女という例は無い。

二・万葉集には、王と女王の例数は、王が二十二、女王は七で、計二十九になる。この中で、父の名を継いだ王と女王は一人もいない。母と同名の皇子、皇女、王、女王も極めて少ない。皇子、皇女の名は、その「出生の地名」や「乳母の苗字」に因んで付けられることは広く知られている。王や王女についても、同じと考えられるが、父の名を継ぐ例は知られていない。

三・養老令

養老令では、王は、内親王を娶れるが、臣は、天皇から数えて五代目の女王なら妻にできるが、四世までの女王を娶ることは許されないとある。現存するのは、養老令の令文だが、この規則は、大宝令まで遡り、規則の精神は天智期にも存在したと考えられる。女王の鏡が、臣下の鎌足の嫡室になるのは、簡単ではない。

四、尊像の制作開始時期

興福寺縁起での尊像に關し、古代日本で生存した人の肖像がいつから製作されたかについては、法隆寺夢殿の「行信像」と唐招提寺の「鑑真像」が最古であり、いずれも八世紀後半であり、僧侶である。六六九年に没した、俗人でもある鎌足の尊像を安置するという所伝は、到底事実とは思われない。そうすると、鎌足の嫡室鏡女王の存在も疑問になってくる。この物語は、鎌足の呼びかけに鏡女王が答えた歌が万葉集にあることから、思いついて、鏡女王を鏡女王に改めて作った話ではないか。

五、額田王と鏡女王の万葉歌の贈答歌の存在（通説・七項の二首）

万葉研究の第一人者・伊藤博博士も言われるように、後人の作と考える。

六、万葉歌・卷二一九二・九三（上記）について

いずれも作者は、鏡女王とされているが、どうして額田王とは記されていないのかについて。鏡女王といえ、むすめ額田王に決まっております、またこの歌は、プライベートな歌である。額田王の名を記している歌は、公的な場合の歌である。

直木説を正論とした場合

一、忍坂街道にある、鏡女王の墓は、無論、額田王の墓ということになる。

二、鎌足は、天智天皇と共に蘇我宗家を滅ぼし、トップの内大臣に取り立てられ、ただ一人「大職冠」を貰うほどに貢献した。故に、特別に天智から、采女の鏡王女を譲り受け、「我はもや 安見児得たり皆人の 得かてにすといふ安見児得たり」という大喜びする歌（巻二一九五）がある。この采女は、地方豪族・鏡王の娘である、鏡王女との了解であるので、無論、額田王になる。

三、鎌足の正妻になった、鏡王女が生んだという「不比等」は、額田王の息子ということになり、不比等と「十市皇女」は、異父姉弟になる。

四、額田王は、最初、大海人皇子妃になり、その後、天智天皇妃となり、その後、鎌足の妻となった訳で、変遷の激しい女性であったことになる。また、興福寺の、元になった山科の「山階寺」は、無論、額田王が鎌足の菩提を弔う為に建立したことになる。

結論としては、ご高名な直木先生の新説ではあるが、不自然で無理があると思える。小生としては、通説の方が、自然であり、且ロマンもあり、通説に従いたい。

第三話 紀路を歩く

久し振りの快晴の元、朝は早目の出発をして、近鉄・吉野線の「市尾駅」には、二時間ほどで到着した。当地は、奈良県高取町になる。市尾からは、「山の辺の道」に次ぐ古道と言われる「紀路」、つまり、「高野街道」に沿って北に向って、「飛鳥駅」に至るべく散歩ルートを決めた。途上には、数多くの六〜七世紀築造の古代の皇族や有力者の古墳が連なっているの、それらが、今日の目当てである。

市尾宮塚古墳

和歌山方面に続く紀路は、ほぼ近鉄吉野線に沿っており、北から市尾辺りまでは、国道一六九号が平行して走っている。市尾駅から紀路に入ると、流石に古道の風情があり、脇の家並みは旧家屋が目立つ。西に進むと直ぐに「市尾宮塚古墳」に上る石段がある。この古墳は、全長四四mの前方後円墳で、後円部は径二三m、高七mで、玄室は六mの横穴式石室の由。珍しく、開口部の鉄柵から「家型石棺」が羨道の奥に安置されているのが見える。開口部に近づくと自動的に石室に電気が灯る仕掛けにしてあり、よく分かり、これも珍しい。出土品は、金銅製太刀、馬具、耳飾り、金銀步揺、鉄製品、水晶、ガラス玉など有力者の墓とされている。六世紀中葉の築造。



市尾宮塚古墳

市尾墓山古墳

全長七〇mの前方後円墳で、周濠を入れると一〇〇m。横穴式石室を持ち、六m長の凝灰岩の家形石棺が出土した由。こちらは、開口部に扉があるが、中は真つ暗で何も見えない。武器、馬具、玉類、土器、木製品や埴輪などが出土し、被葬者は豪族とされ、六世紀初めの築造とされている。この古墳は、平地にどかつと坐っており、古墳上には、樹木も無く丸坊主の状態の古墳全体を見ることが出来、古墳上にも昇れるので、上からは、遙か西の二上山がくっきり見ることができる。

森カシ谷遺跡

途上、「薩摩」という地所を過ぎて、高取中学校脇を北に上って行くと「森」という地所に「リベルテホール」という立派な公民館があり、その北側の佐田丘陵に「森カシ谷遺跡」がある。大規模な土塁である。高取町教育委員会の発掘調査で、この遺跡は、飛鳥時代の「砦」であったことが判明し、その後、古墳時代終末期の古墳が築かれたことも判明した由。砦は、紀路の交通の要所に設置され、紀路を真下に見下ろし、飛鳥京を防御する為にあつたと考えられている。建物跡、濠、排水溝や柵が検出されている。砦築造の時期は、七世紀後半とされている。

因みに、この辺りの地名には、「薩摩」があり、東には「吉備」、「松山」があり、西には「兵庫」、南には「土佐」といった具合で、古代、飛鳥京建設に各地から召集された工人や労働者が住み着いた場所であることが、良くわかる。「森」から、更に北に向って坂を上っていくと、「佐田」という地所に着く。

岡宮天皇陵

佐田には、宮内庁が比定する「岡宮天皇陵」が存在する。天武天皇と持統天皇の皇子であった「草壁皇子」は、没後「岡宮天皇」と追贈された。石段を上ったところに、白い鳥居がある。脇には、神社が鎮座しており、脇からは玉垣の中に径二〇mほどの円墳が見られる。持統天皇は、我が子の草壁皇子が夫の天武の次代として即位することを熱望し、ライバルとされた文才武勇共に類まれな逸材とされていた、同母姉の「大田皇女」と天武との皇子「大津皇子」を謀反の罪を被せて刑死させるまでしたが、生憎、草壁は二十八才の若さで死去した。そこで、持統は、草壁と後に元明女帝になる「阿閉皇女」の皇子である、孫の「軽皇子」（後の文武天皇）を天皇にせんとし、幼少の軽皇子が成長する六九八年まで、自身が帝位に就いた経緯がある。

束明神古墳

近くに「束明神古墳」の高い石段があり、春日神社の鳥居がある。石段を上りきると、社殿脇に円墳状の墳墓がある。高取町教育委員会の説明板によると、径六〇mの終末期古墳で七世紀後半の築造で、「八角形古墳」とある。出土した歯の鑑定から性別は不明だが、被葬者は青年から壮年とされ、皇族級の墳墓の特徴である八角形墳と石槨の規模の大きさ、出土した石棺、須恵器などから、こちらが、本当の「草壁皇子」の墳墓の可能性が大とされている。

マルコ山古墳

束明神古墳のある、越智丘陵から北方の真弓丘陵には、有名な史跡「マルコ山古墳」がある。名の通り丸い墳

丘が遠くからでも見える。墳丘上には樹木は無く、除草もされ、丁寧に整備されている。墳丘上からは、東の飛鳥地方が綺麗に眺望できる。この古墳は、対角辺二四mの二段式「六角形墳」で凝灰岩の二・七m長の横口式石槨で、内部全面に漆喰が塗られていた由。木棺には金銅製飾金具、副葬品は金銅製太刀、金具、錠が出土し、七世紀末〜八世紀初頭の築造で、被葬者は皇族クラスの人とされている。古墳脇に咲いている紅梅が、周りの冬の枯れ木の中に目立って美しい。

真弓鑿子塚古墳

最近、この古墳は新聞を賑わしている。マルコ山古墳から、飛鳥駅に向う途中に「櫛玉命神社」があり、その脇の田圃道を北に坂を上って行くと三十分ほどで車道に出る。其処から山道を下ったところに、「真弓鑿子塚古墳」があり、現在も明日香村教育委員会の調査が続行されており、十名ほどの作業員が墳墓上で作業中であつた。この古墳は径二三m、高さ五mの円墳であり、横穴式石室は南北二つの羨道を持つ特異な石室であり、六m長、四m幅、五m高さの巨大な玄室を持っている。今まで、金銅飾り金具、馬具や須恵器が出土しており、六世紀後半の築造で、被葬者は渡来人と推定されている。現在続行中の調査結果で、また新しい発見が予想される。

近くには、「牽牛子塚古墳」と有力氏族の墳墓とされる「岩屋山古墳」がある。牽牛子塚古墳の石室は、磐塊



マルコ山古墳

を剝り貫いて二室あり、生前からの斉明の希望通りに、斉明天皇自身と娘の「間人皇女」との「二棺合葬墳」であるとの学説が有力である。西側の「車木」の地の山手の石段を登ると、宮内庁が比定する「斉明天皇陵」と子の天智天皇の皇女で天武天皇妃、つまり、孫に当たる「大田皇女墳墓」が並んである事は、拙作「歴史散歩と逸話」にも言及した通りである。何れも参観済みなので、近くの一風変わった民家風の喫茶店に入り一服して、飛鳥駅に向った。今日は、一五kmほどの気分が和らぐ散歩であった。

奈良盆地東の大和青垣と言われる山麓にある、飛鳥から北の平城に向かう最古の古道と言われる「山の辺の道」には、多くの古代天皇陵、皇族や有力者の古墳が連なっていると同様に、南の紀の国に向う「紀路」にも皇族や有力者の古墳が連なっているのが歴然とわかった次第であった。

第四話 お水取りの話

東大寺・二月堂の「お水取り」は、正に春を告げる行事で、その声を聞くともう春は近い。お水取りは、「修しゅ二に会え」と言ひ、二月を修めるといふ意味だが、お水取りが終わると、毎年必ず、めつきり春めいて来る。寒い冬を耐えてきて、春を待ち焦がれる時期になると、皆、「奈良のお水取りが始まる」と言つて、青菜の季節が近いことを覚り、気分がうきうきしてくるのである。



東大寺二月堂

十一面悔過

お水取り、つまり修二会は、旧暦では二月、新暦の三月に行われている。正式名は「十一面悔過じゅういちめんげか」と言い、人間が本性的に持っている様々な罪過を、二月堂の本尊「十一面観音菩薩」に懺悔して、鎮護国家、天下安泰、五穀豊穰、万民豊樂など人々の幸福を願う行事である。

行事に参加する十一人の練行衆は、前年の十二月十六日の良弁僧正の命日に管長により選抜され、「別火」という事前行事を二月から行い、三月一日から十四日までの「本行」では、一汁一菜の昼食で、ご本尊に懺悔し、様々な経文を読経し、「南無観自在菩薩」（観音菩薩に帰依します）と繰り返し唱えながら、厳しい行をおこなう。この行事は、練行衆の外、補佐するものを含め、計四十人のチームで行う。尚、別火では、俗界とは別の火を用いる為、火打ち石で火をおこす。

上野道善管長は二百十九代別当

現在の管長「上野道善氏」は、過去三十一回練行衆として選抜され実行された由で、最多の記録保持者である。お水取りは、大仏開眼と同じ年の七五二年、初代別当・良弁僧正の高弟である「実忠和尚じつちゅうかしょう」により始められ、平成二十年で一二五七回目という。過去、東大寺は、平安末期の「平重衡」の南都焼き討ち、中世期の三好・松永の乱での被災、明治維新、第二次世界大戦などの最悪の状況下においても一度も止めることは無かったという。上野管長は、昭和十四年、天理市の生まれで、龍谷大学を卒業され、東大寺に入られ、平成十九年五月二百十九代別当に就任された。大変温厚な人柄で、親しみのある話ぶりをされる。